

『労働生活』を読むために

福井 憲彦

はじめに

前世紀末から今世紀初頭にかけて、フランスでは、大衆をターゲットにしたマスメディアとしての一般新聞が大きく発展したが、労働運動や社会主義運動の分野でも、新聞や雑誌といった定期刊行物が、みずからの運動や思想への支持基盤を拡大する手段として、あるいは仲間うちのメディアとして、重要な役割をになうべくさまざまに刊行されるようになっていた。そうした社会運動にかかわる新聞や雑誌は、その多くが持続性に欠けるものではあったが、それらのなかで、現在ではもはや忘れざられてしまったような人たちが、あるいは現状の社会問題や政治動向を俎上にのせ、あるいは来たるべき未来社会について語ることで、現状変革のメッセージを発信していたのであった。

本稿でとりあげる『労働生活 *La Vie Ouvrière*』という雑誌もそのうちのひとつであるが、それはさまざまな点で、その他のものとは異なる性質をもっていたものとして注目される。

この時代の社会運動史に関心をもち、あるいは研究しているものにとつ

『労働生活』を読むために（福井）

ては、この『労働生活』誌の重要性はすでによく知られたところとなっている。たとえば、現代フランスのもっともすぐれた経済史家の一人であったジャン・ブーヴィエは、ほぼこう書きしるしている。前世紀末から今世紀初頭にかけては、革命的サンディカリズムにおいて基調をなしていた「ゼネスト」による社会革命という考え方が、「地味な実証研究を、すなわち、人がそれと闘おうとしていた時代の資本主義の研究を、長い間、全く無用なものだとしてきたように」みえる。ところが「第一次世界大戦前——まさに戦乱の直前——に、組合運動家のあるグループはこの問題を再評価しようとした。このグループの立場が、今日、ひどく近代的にみえることをみとめなければならぬ」。この「経済変動や資本主義の諸構造をとくに意識して分析しようとしていた」グループこそが、『労働生活』誌のグループなのである。「『労働生活』誌は、フランス資本主義および世界資本主義の若干の部門の状態や諸構造に関するすぐれた研究を発表した」⁽¹⁾ものとして、注目に値する、と。

また、やはりすぐれた社会史家の一人であるミシェル・ペローは、この時代の都市民衆諸階層についての見事な総括論文⁽²⁾において、『労働生活』にいくつかの点で高い評価をあたえている。たとえば、このグループでは、労働者と知識人とが共存していたが、これは当時としては新しい現象であった。そして、世紀末にフェルナン・ペルーチエによってこころみられた方向を受け継ぎ、基本データの収集にはじまる現状調査を基盤に、労働運動自身のものとして資本主義経済構造分析が追求されていた。そこには、資本主義の最終的危機といった安易な認識への深い反省がみとめられるのであって、それは、1880年代のカタストロフ待望論⁽³⁾とも、90年代のゼネスト革命論とも、根本的な姿勢において異なっていた。「フランスはいま、経済成長期を経験しつつある。それは旧来の構造を断ち切り、工業と

農業の重心のあり方を動かし、労働と生活の諸条件を根本から変えるものである』⁽⁴⁾という基本認識にたつて、産業の近代化や技術進歩を批判的に受容しつつ、労働者自主管理型の社会への方向が模索されていた。おおよそこのように、ペローはおさえている。

大略において、このような評価には疑念の余地はない。さらに、経済分析への体系的な関心ばかりではなく、戦争の可能性という脅威をどのように捉えていたか、あるいはネオ・マルサス主義やカトリック系労働運動の抬頭、あるいはフェミニズムの動きにたいして、また教育のあり方についてなど、同誌が示した関心は、十分に分析するに値するものがある。

ところで本稿では、このような内容分析には立ち入らない。というよりも、その前提作業にあたるわけだが、同時代のコンテクストのなかでの『労働生活』誌の位置をおさえるために、この雑誌のいわば形式的な側面に注目しておきたいのである。すなわち、その刊行のスタイル、機能のしかた、編集や財政の状況、読者対象と購読者をめぐる状況、そして中心グループの顔触れとその目標、などの諸点である。

じつはいままで、これらの形式的な側面の分析についても、また立ち入った内容分析についても、雑誌の重要性が指摘されるわりには十分になされてきていない。むしろ重要性が、とくに経済分析をめぐって共通確認になっているがゆえに、それ以上に立ち入った検討がなされてこなかったといったほうが、あるいはあたっているのかもしれない。

本稿があつかう形式的な側面については、コレット・シャンペランによる短い紹介論文がある⁽⁵⁾。彼女は、社会博物館 Musée social の図書室司書を長年にわたって務めてきた有名な社会運動史研究者であり、父親の関係から生前のモナット（後述するようにこの『労働生活』誌の推進者）とも知己だった人である。しかしこの紹介論文は、残念ながららたいへん簡略なも

『労働生活』を読むために（福井）

のにすぎない。

前おきの最後として、資料についてひとこと。ピエール・モナットが残した文書類は、フランス社会史研究所に納められており、『労働生活』誌の形式的側面にかかわる資料もある可能性は高いが、私はこれは未見である。本稿ではもっぱら『労働生活』誌そのものに記載されたデータを整理して用いた⁽⁶⁾。

1. ミリタン雑誌としてのフォルム

まずは刊行期間や体裁など、文字どおりの形の面からみてみよう。

『労働生活』は1909年10月5日付で創刊号が出されたあと、第一次大戦が勃発する直前の1914年7月20日付第116号まで、毎月2回、5日付と20日付で足かけ6年にわたって刊行された。CGT（労働総同盟）や社会党といったような大きな組織を直接背後にもたず、革命的サンディカリズムに与する労働者活動家（ミリタン）を主要な担い手として、まったくの自主運営でなされた当時の雑誌としては、この持続性じたいが注目に値するものである。

もちろんその運営は楽ではなく、日付は建て前におわることも多く、実際上の刊行日の遅れは、弱点としてたえず問題になり続けていた。なかには、印刷所が洪水にみまわれて作業不能になり、遅れが余儀なくされる（9-10合併号）といった突発事もあったが、基本的には遅れは、ひとつには予定の原稿がなかなかうまく集まらないこと、いまひとつに、中心人物モナットがいかに実直有能でも孤軍奮闘には限界があったこと、の2点につきるといえるだろう。

ほぼA5版の大きさだったこの雑誌は、1号が64ページで出発、例外

的に増ページ号となった第 26、27 号、および財政的な冒険をおかして 80 ページ立てにした第 49 号から 63 号までをのぞいて、64 ページが原則であった。内容的に納得のいくものを確立するにはページ数をいまし増やすことが必要だ、として、最後までページ増は追求課題にかかげられたのではあったが、結局、あえて財政面の冒険をおかした一時期をのぞいて、それは実現されることはなかった。

価格も一定しており、定期購読料は、フランス、アルジェリア、チュニジアについて 3 カ月 2 フラン 50、半年 5 フラン、1 年 10 フラン、1 冊の単価は 0.5 フラン。ただし鉄道ストを特集して通常の 2 倍、128 ページの増大号となった第 27 号のみ、価格も 2 倍の 1 フランであった。外国については 3 カ月で 3 フラン、半年で 6 フラン、1 年では 12 フランである。この時代は、経済的には比較的好況期にあたっており、物価の上昇が庶民にとっては大きな問題となった時代であった。したがって、雑誌の製作と維持にかかわる費用も上昇はしていたはずであり、じじつ末期には購読料の値上げも選択肢として考えないではなかったのであるが、労働者ミリタを主たる読者対象としていた以上、値上げは困難だったのである。

雑誌の装丁や造本についての関心も、少なからず表明されている。モナットはもともと印刷所の校正職人であり、『労働生活』発刊当時まだ 28 歳であったが、雑誌づくりの素人ではなかった。はじめのうち裁ちおとされていなかったページは、第 18 号（1910 年 6 月 20 日付）で「今後は裁ちおとしにする」ことが告げられている。反対の投書もあったが、そもそもこの雑誌は、書齋でペーパーナイフをもった知識人が読むためのものではなく、労働者が仕事の場で手がすいたときに、あるいは仕事にむかう途中、あるいは食事をとりながら読むためのものだから、ページは最初から切られていたほうがよい、というきわめて現実的な観点から、そのような措置

『労働生活』を読むために（福井）

がなされたのであった。雑誌やパンフレットにせよ、もっと厚手の書籍にせよ、この時代の仮綴じ本は、今はなつかしいあのページの端が切られていない折り本が、一般的だったのである。大きさがA5版ほどのものにされたということも、厚さが比較的小さえられたということも、価格をおさえて労働者のふところ具合と対応させ、そして折ればポケットに楽に入るようなものにする、という現実的な観点からなされたものであった。そのような現実的観点のみでなく、雑誌の見場や見易さについての関心も示されており、植字の体裁、マルジュのとり方、ややアール・デコ風のタイトル字と目次の概要を載せた表紙の装丁、あるいは途中から財政事情をにらみつつ採用された写真掲載など、製作面の配慮がかなり注意して払われていたことがわかる。今日であればこれはあたりまえともいえ、むしろ内容よりも見場ばかりが走っているような雑誌すらあるわけであるが、当時の、それも社会運動系のものとしては、これはかなり特例的なことであった。

もうひとつ、当時としてはまだあまりなじみがなかったやり方だったのは、その販売方式であった。はじめからこの雑誌は、キオスク（街頭の新聞・雑誌販売店）でのバラ売りはまったく考えず、もっぱら定期購読方式のみをとったのである。これは、ひとつには財政基盤と発行数とのバランスをとって持続性を確保しようとするねらいであったろうが、同時にまたこの雑誌の発行方針ともかかわっていたことがみのがせない。

つまり『労働生活』は、一般読者へむけてメッセージを発することを目的にするのではなく、労働者ミリタンたちの「行動の雑誌」だというのである。換言すれば、労働大衆や一般読者を対象とした、プロパガンダを目的にする雑誌ではなく、労働者ミリタンのための行動の基盤となるべき、労働者ミリタン自身による情報と考察の雑誌だというのである。「はじめに」の部分でふれたような、この雑誌の特色のひとつをなした経済分析へ

の一貫した関心は、そのような労働者ミリタンとしてのものであった。

雑誌の目標や方針内容じたいについては、最後に立ちもどることにして、読者対象が労働者ミリタンで、作り手も基本的に同様な者たちからなるという原則がとられたということは、この雑誌そのものが、労働者ミリタンたちの一種の知的共同関係をつくりだす場とみなされていた、ということの意味している。

このような共同的な性格は、とりわけ雑誌発刊後しばらくのあいだ、つまりまだ広く雑誌の性格が人びとに伝わっていないとみなされたあいだ、たいへん強調されている。第1号に掲載された発刊のマニフェストがそうであったし、第2、3号、あるいは7号においても、それは強い調子で打ち出されている。このことは、排他的原理として考えられていたわけではなかったから、寄稿者やまた購読者に知識人というべき人たちが含まれてくることを妨げるものではなかったけれども、しかしこの雑誌づくりにおいて中心グループを形成した人たちが、知識人や政党政治家にたいして強い警戒の念をもっていたことをうかがわせる。じじつ第1号の発刊のマニフェストでは、自分たちは決して一色ではなく、多様な立場にあるサンディカリストのミリタン集団だが、議会政治主義に反対する点では一致している、ということが明言され、あくまで知識や思考はサンディカリストとしての行動のためのものだということが、繰り返して強調されてゆくのである。

こうした共同的な性格をみずからに課すことを誌面において現実に示すものとして、編集や運営、財政の内部事情を隠さず、また粉飾せずに率直に購読者に知らせてゆくことが約束された。すぐれた進んだ書き手が、まだそうではない人たちに教えを垂れる、というプロパガンダの図式、ないしは前衛による教育論ではなしに、購読者と共同歩調をとって、共同の場

『労働生活』を読むために（福井）

をつくってみようという試行であった。

定期購読者数の推移については後述するが、当初の目標1,000名が第1号のマニフェストでかかげられていたのにたいし、はじめ150しか集まらなかったことが、第2号ではやくも明示されている。なにも、そんなに弱体な状況を白日のもとにさらす必要はないではないか、という疑問は当然でてきたのだが、中心グループは、あくまで内実をはっきりさせたうえで意志的な協力をミリタンたちに呼びかける、という姿勢を崩すことがなかった。政治的策動をよしとする観点からすれば愚直というほかならうが、そもそもそうした議会政治や党派政治に示される策動を拒否することが出発点にあったこの雑誌は、この姿勢を最後まで一貫して変えることがなかったのである。60号代から70号代のはじめにかけては、一時1,700をこえていた購読者数が1,500にまで低下した危機的な時期であったが、このときにもその現実が隠されることなく報告されている。それにたいしてはふたたび、減ったことをわざわざ表に出すことはない、せつかく一所懸命やってきたミリタンたちを意気阻喪させるではないか、という批判もでてくるのであるが、モナットをはじめとした中心グループはあくまで原則をゆずることはなかった。

内容的な方針とも関係して、定期購読のみを基盤にするということは、その数の確保、そして購読期間が切れたあとの再購読の確保が、雑誌の存続にとって死命を制するものだということである。じっさいそれらの点は、雑誌運営上の重要課題として、そしてまた煩瑣な手間を必要とする作業として、モナットらの頭を悩ますことになるのである。購読者の参加は、そうした定期購読者拡大のための宣伝や、たとえば物価上昇などについての情報提供といった形でも要請され、それらが一定の実をあげていたことはたしかであった。しかし購読者のネットワーク化は、一度だけ1910

年7月31日に購読者の集いがパリで開かれたものの、結局は成功するこ
とがなかった。

2. 「中核」グループと創刊の経緯

雑誌の中心人物がモナットであったこと、そして彼のまわりに中心グル
ープがあったことについてはすでに言及してきたが、「中核 noyau」とみ
ずから称したこの中心グループは、どのような人たちからなり、また創刊
の経緯は、どのようなものであったのであろうか。

いずれもミリタンたちからなる雑誌創刊時の「中核」グループは、つぎ
のような顔触れであった。まず、発足から停刊まで一貫して編集と運営の
中心にいたピエール・モナット。続いてアルフォンス・メライム（金属）、
アシル・ピカルとジュール・ニコレ（建築）、オーギュスト・ガルヌリー
（宝飾）、シャルル・ヴォワラン（皮革加工）、ピエール・デュマ（服飾）、ジ
ュール・ラピエール（セーヌ＝エ＝オワーズ県連）、シャルル・デルザン（ガ
ラス）、ジュールジュ・デムーラン（鉱山）。カッコ内は、それぞれミリタ
ンたちが活動していた母胎となる組合である⁷⁾。

このうち、ヴォワランについては生年が不詳であるが、ガルヌリー44
歳と、まだ28歳だったモナットをのぞいて、他はすべて30代であった。
いずれも、ほぼ世紀転換期からサンディカリズムの世界で頭角をあらわし
てきた新世代のミリタンたちだったとあってよい。1880年代や、ましてや
パリ・コミューン以前の第二帝政といった、労働運動の「英雄時代」を経
験してきた人たちではなかった。このことを、当時の労働運動が直面して
いた転換期的な状況とすぐに直接的な照応関係で解釈しようとするのは、
いささか乱暴なことであろう。けれども、19世紀なかば以来の職人型熟

『労働生活』を読むために（福井）

練労働者を中心としてきた運動が、産業構造じたいの転換への動きと労働市場の変化のなかで、さまざまな困難をかかえ、転機をむかえていたことはたしかであった。そうしたなかで、新しいミリタンの層を形成することが、革命派とか改良派といった立場のいかにかわらず、必要になりはじめていた時代であった。この「中核」グループは、そうした状況下に登場してきた革命的サンディカリストのミリタンたちから、なっていたのである。

たしかに CGT には、公式機関紙として週刊の『人民の声 *La Voix du Peuple*』という新聞があったが、彼らには、それでは不十分だと思われた。CGT の内部においても、そのトップの人事で革命派のグリフェールの書記長辞任（1909年2月）に表面化したような、革命派对改良派といった路線の対立が隠しようもなくなりつつあった。『労働生活』誌が、何よりもミリタンにむけて発刊された雑誌だったということは、このような労働運動をめぐる状況とのかかわりにおいて理解されなければならない。

創刊の経緯については、1910年7月31日の購読者の集いで、モナットによって簡潔な報告がなされている⁽⁸⁾。

創刊のすでに数年前から、モナット、メライム、ピカールたち数名のあいだで、ミリタンによるミリタンのための雑誌が出せないものか、という模索がはじめられていた。それまでの刊行物は、いずれも表面的なプロバガンダに終始していた。いうなれば、ゼネストだの社会革命だの、資本主義の最終的危機だのといった「いずれも常套句を用いて、同じ主張を繰返して」⁽⁹⁾、結局のところ十分な実をあげることができなかった。だからまずは、自己教育によってミリタン自身の質の向上が実現されていかなければならない、というのであった。それは、かつてフェルナン・ペルーチエがこころみて、志なかばにして他界したゆえに実現しなかったものとあ

を引き継ごうという意識のもとに、はじめられた模索でもあった。『労働生活』というタイトルじたい、ペルーチエのかつての仕事⁽¹⁰⁾からとられたものであった。

雑誌を発刊するには、当然ながら元手が必要である。それをどうするかが、実現へのネックになっていた。しかし彼らは、特定の組織やパトロンをバックにして動くことは考えなかった。あくまで、自立した共同の場づくりを求めたからである。彼らの計算は、つぎのようなものであった。

1年目に必要な経費は11,000フランと想定される。1年目に、年間定期購読者をなんとか800名確保できれば8,000フランの収入になる。したがって1年目の推定赤字は3,000フラン。2年目には購読者数が1,200名確保できれば、12,000フランの収入がみこめる。しかし経費も多少上昇するであろうことを考えれば、推定赤字は2,000フラン。この当初2年間の推定赤字を埋めることができる5,000フランを、当初資金として確保して出発しよう。

あやういといえ、かなりあやうい計算ではあったが、結局のところ、こうした概算にもとづいて、雑誌発刊を支持する人たちからの拠金のもとに出発することになるのである。シャンペランによれば、大口の拠金はつぎのようなものであった⁽¹¹⁾。かつての第一インターナショナル末期、スイス・ロマンド地方でジュラ支部を率いて、アンチ・マルクス派として活躍し、このころはパリで革命的サンディカリストたちと交流をもっていたジャム・ギヨームから1,000フラン。「ジュラシエンヌ」というその第一インターナショナルをたたえる歌をつくり、アナーキスト系の新聞発行者でもあったシャルル・ケレルから600フラン。ジュネーヴのオットー・カルミンから500フラン。さらに、もとの『自由ページ』誌にかかわっていたシャルル・ギエースから、同誌の清算残高1,300フランが託され、やは

『労働生活』を読むために（福井）

り同誌にかかわっていたモーリス・カーン、ジョルジュ・モローから、それぞれ 300 フラン、200 フランが寄せられたのであった。

じつは「中核」グループの周辺でも、発刊にあたって持続性をあやぶむ声はあった。定期購読に依拠するといっても、せいぜい 300 ほども確保できれば上々であろうから、そもそも計算に無理があるのではないか、といった意見である。じっさい当時の社会運動系の雑誌における定期購読数は、長い歴史をもつ『社会主義運動』が 700 ほど、『雑誌・社会主義』が 300、『雑誌・労働組合』が 600、という状況だった⁽¹²⁾ことからしても、こうした声がグループ中にでたとしても不思議ではなかったし、むしろ当然だったともいえよう。

「中核」グループのメンバーは、いずれもすでにサンディカリズムのなかで頭角をあらわしていたとはいっても、まだ中堅のミリタンたちであって、決して著名な、その行動が着目されることまちがいなしといったような人たちではなかった。たとえばメライムは、その控え目で寡黙ながら断固とした強い個性によって、すでに革命的サンディカリストの一人として名はおっていたが、しかしすぐれた知性を示すことによって注目されるようになるのは、何よりこの『労働生活』に積極的に関与した時代からのことである。そのなかで、この上背は低い、濃いヒゲを鼻の下にたくわえた落ちついた感じの男は、「現今のサンディカリズムを代表する人物」⁽¹³⁾とまでいわれるようになるのであって、その逆ではなかった。このような次第は、サンディカリストとしてのジョルジュ・デュムランにしても同様であった。

結局のところ創刊積極派が押し切って、寄せられた 抛金を元手に 1909 年 10 月、刊行の運びとなるのである。第 1 号は 5,500 部刷って、定期購読してくれそうな個人や組織へむけて 5,000 部を発送、同様に第 2 号も

3,000部が発送された。見込みだけで送りつけるわけであるから、冒険といえば冒険、乱暴といえば乱暴な話ではある。しかしその後も現実の定期購読者の実数のみではなく、定期購読が期待できる人たちの住所をミリタ仲間や購読者から提供してもらっていきなり送りつけるという方式は、一貫して続けられてゆくのであった。正しく伝わって読んでもらえればとってくれるはずだ、という自信というか楽観というか、もっぱら前だけをみて進もうというやり方は、良かれ悪しかれおどろくべきものがある。ただ、それもあって、財政問題が最後の最後まで困難をかかえ続けたことも、またたしかであった。

3. 編集・運営の実務

月2回刊行の雑誌を自主的に製作、流布してゆくのは、なまやさしいことではない。まず物理的に、拠点となる場所と、実務的な編集・運営を担当する人物とが必要である。ただでさえ当初の赤字を覚悟して出発した「中核」グループにとって、専従スタッフを何人もおくことは困難であった。すでにのべてきたように、その役をになったのがモナットである。彼が専従のための給金をもらって、編集・運営の雑務すべてを責任をもって担当することになる。もちろん「中核」という彼ら自身の表現にみられるように、モナット個人の雑誌ではなかった。内容の構成をどうするかとか、運営上の協議は、「中核」グループとその協力者たちの集まりによって支えられていた。毎週4日、各自の仕事がおわったあとの夜9時から11時にかけて、集まれる人が集まって必要な作業を分担して運営するというスタイルで、出発したという⁽⁴⁾。そうした「中核」のまた核に、モナットが位置したわけである。

『労働生活』を読むために（福井）

本拠にできるような、それでいて家賃がそれほど高くない場所を探して歩いたのも、モナットであった。探しだされたのは、第6区のドーフィヌ街42番地にある小さな一部屋。家賃は年間250フランであった。セーヌ左岸、ボン・ヌフからほど遠からぬ、ちょうど造幣局の裏手にあたる一角である。古い建物の1階、中庭に面して小窓がひとつあいているだけの、薄暗く狭い、しかし天井の高いこの部屋に、おそらくは夜ともなればミリタンたちが集まって、雑誌をめぐるって談論風発、作業にいそしむ姿が想像される。だが、じきにここも、雑誌の包みだの物があふれるようになり、人が4人も訪れてくれば、4人目は包みの上に腰かけなければならないような案配になっていった⁽¹⁵⁾。

これでは集合場所としての役割は果たせないし、できれば公開の図書室もあって、ミリタンや労働大衆に広く読書をすすめたり、集会室も設定できるようにところを確保したい。こうした願望は、発行後ほぼ1年になろうかというころ、定期購読者数が900という予想以上の成果を背景に、強くなっていった。そのためには、購読者数が最低限1,400になる必要がある、ということで、購読者数確保がいっそうきびしく追求されることになるのだが、じっさい1911年1月7日に、新しい本拠への移転が実現することになる。

新しい場所は第10区、サン＝マルタン運河のほとり、ジェマップ河岸96番地。ここは、労働取引所やセーヌ県連の事務所などサンディカリスムの拠点にもすぐ近く、歩いても苦にならない範囲にあった。今度はややぜいたくに、1階の商店用スペースには事務所と書籍販売部をおき、2階部分に集会室をかねた図書室をおくことができた。しかし、広ければ家賃も高かろうというもので、いっきょに900フラン、同時に本屋を開くための営業税300フランも必要となり、あわせて1,200フランの出費がまた財

政を苦しめることになる。

印刷は活版であるから、もちろんこの本拠でおこなわれたわけではない。第1号から96号までは、パリの南東の郊外、ヴィルヌーヴ＝サン＝ジョルジュにあった労働者協同組合印刷所、第97号（1913年10月5日付）からはやや遠方、オーセールにあった「ユニヴェルセル」という名の、やはり労働者協同組合印刷所でなされた。いずれも書籍労連関連の印刷所であった。

はじめ編集・運営の双方の責務を一身になっただのがモナットだけだったが、発行人（*gérant*）として名をあげていたのはH・ランツという人物である。モナットは、ドーフィース街の本拠を探したり、移転先のジェマップ河岸のデュプレクスを見つけるのにも、このランツと協力してやっているのであるが、このランツなる人物がどのようなタイプの人であったか、いまのところデータがなくて不詳である。「中核」グループの一員として名があがることはなかったランツは、はじめ発行人として名が雑誌に記され、ジェマップ河岸移転のまえから運営上の実務を担当して会計にもあたっていたらしく、移転後は常駐して、書籍販売を担当する任にもついていた⁽¹⁶⁾。創刊当初からかどうかはわからないけれども、ランツもまた専従としての給金をうけていたと考えるほうが自然であろう。

第42号（1911年6月20日付）からは、発行人もランツではなしにモナットとなり、そして第46—47合併号（1911年8月20日—9月5日付）によると、運営上の実務と書籍販売とは18歳のバリエという青年にまかせることが告げられている。ということは、この6月から8月のあいだに、何らかの理由からランツが手を引いたのち、しばらくモナットが一人ですべてを処理していたということであろうか。バリエという人物もふくめて、このへんの詳細についてはよくわからない。

『労働生活』を読むために（福井）

この1911年5月ころから、刊行の遅れにたいする不満の声が読者からかなり寄せられていたことが、誌上でもあきらかにされている。じつはこの時期には、モナットはCGTの新しい日刊紙『組合闘争 *La Bataille Syndicaliste*』へのテコ入れもやらなければならない立場にあって、実質的な編集の手助けをしていた。同時に『労働生活』を月2回刊行する編集・運営の実務も一人で切り盛りしていたとなれば、刊行の遅れもまた無理からぬことであつたろう。パリエの登用を告げた第46—47合併号では、同時に、『労働生活』に関心をもつ一人でも多くのミリタンに「中核」グループに加わってほしい、それが必要とされている、ということが訴えかけられており、創刊以来の「中核」グループによる共同運営があまりうまく機能していなかったことがうかがわれる。その理由がどこにあったのかを明確にできるような資料は、いまのところない。創刊当初の「中核」メンバーは、ニコレとガルヌリーをのぞいて、ほかは最後まで「中核」グループに名をつらねているし、寄稿もしているのだから、何か根本的な考え方の対立があったからというわけではない。むしろ、モナット自身がそうであったように、各自の仕事や活動上の都合といった状況的な要素が大きかったとみるべきかもしれない。いずれにしても、推測の域はでない。

じっさい、やっと1,700をこえるまでに達していた定期購読者数は、第40号をすぎたあたりから下降しはじめ、第69号（1912年8月5日付）では、このまま停滞状態が続けば雑誌の存続が困難になりかねないということが訴えられている。この1911年春すぎから1912年夏にかけての1年ほどは、そのかん状況打開をめざして敢えて増ページ化がこころみられたりはしたけれども、『労働生活』の存続にとってもっとも苦しい時期だったようにみえる。この時期の増ページ化は財政を苦しくしただけで、発刊の遅れは12年になっても深刻なままであった。

4. 「中核」グループの立てなおし

1913年秋、モナットと実務を分担していた青年バリエは兵役にとられ、かわって、皮革加工労働者組合の連合書記を辞したばかりだったヴォワランが、モナットに口説きおとされて10月1日から運営担当の専従に着任した。このヴォワランは、創刊当初の「中核」メンバーだった人である。

創刊当初の「中核」グループのみではうまく編集・運営の支持ができず、結局のところはモナットの双肩にもっぱら雑誌の運命がかかってしまっている、といった状況を打開しようとするころみは、何回か繰り返された。

たとえば、1911年9月21日、創刊のはぼ2年後であるが、ジェマップ河岸の本拠で協力者の集会が開かれ、雑誌記事を内容分野ごとに分担する体制をつくるころみがなされている。この種の協力者の会合は月2回、第1、第3月曜日に自由参加のオープンな形式でやってゆくことが決められ、じっさいしばらくのあいだはその召集が、雑誌に記載されている。このころからアルフレッド・ロスメルが、はじめは本名のグリオの名で姿をあらわしており、徐々に新しい「中核」メンバーが加わりはじめていたあたりがかわれるが、それぞれ自分自身の仕事や活動をかかえながら参加しているミリタンたちによる「中核」の立てなおしは、なかなかうまくは進行しなかった。

第84号（1913年3月20日付）で、財政状態の困難さと購読者数増加へむけての協力を訴えた声明には、「中核」を代表して、ということで13名の名前があがっている。そこでは、創刊時のメンバーのうち、ニコレ、ガルヌリー、ラピエールの名がぬけ、H・アモレ、レオン・クレマン、ジャム・ギヨーム、R・ラフォンテーヌ、アルフレッド・ロスメル、ヴィクト

『労働生活』を読むために（福井）

ル・ルーディースが加わった。この新しい顔触れのうち、ギョームは、創刊のために大口拠金をした古参のアナーキスト系人物であるが、労働運動の世界で大きな位置をしめることになるのは、ロスメル一人である⁽¹⁷⁾。技術者のルーディースは、メライムとならんで『労働生活』誌上における経済分析の面で貢献した人物であったが、彼もふくめ、ギョームとロスメル以外の新しい人たちは、ミリタンとして特に注目される人たちではなかった。

その後、雑誌の末期における「中核」グループの名前には、教員組合のミリタンだったモーリス・デュボワ⁽¹⁸⁾が加わり、また第84号の声明ではぬけていた、創刊時メンバーのラピエールの名が復活している。しかし、これらの出入りについての立ち入った状況は、わからない。

1913年10月から、モナットとヴォワランによる二人専従体制がとられたけれども、財政状態はいっこうに改善の方向にはむかわなかった。第108号（1914年3月20日付）は、ふたたび「中核」グループによる呼びかけを掲載して奮起をうながしている。この当時、定期購読者数はまた1,700をこえて1,800に近かったと思われるが、健全な財政のもとに雑誌を発展させるためには、どうしても3,000の確保が必要だということで、懸命の努力が訴えられたわけである。ヴォワランは、少しでも経費をおとすために、自分が辞職して一人分の給金をうかすべきだと主張して、3月1日付で退任した。

またもや、モナット一人の専従体制に逆もどりしたのだが、発足当時よりもはるかに多い定期購読者を対象に、実務すべてを一人が担当することはやはり無理であった。停刊のひとつ前の号、第115号（1914年7月5日付）では、刊行の遅れなどの混乱の責任をとってモナットが運営実務の担当に、そして編集をアルフレッド・ロスメルが担当する体制が、「中核」

グループの承認のもとに2カ月まえからとられることになった次第について、報告されている。ということは、モナット一人で2カ月ほど頑張ってみたが、やはり困難であることがあきらかになった、ということであろう。

ロスメルとモナットという、きわめて強力な二人のミリタンを中心に、拡大した中核グループをもって再出発しようとしていたまさにそのとき、そして定期購読者数がまた努力のかいあって上昇にむかい、1,900をこえはじめていたまさにそのときに、第一次大戦の勃発がこの雑誌の息の根をとめることになったのである。

5. 購読者の動向

すでにみたように『労働生活』は、ミリタンたちの自己教育の場、現状認識と相互討論の場を共同で構築しようという目標をかかげていた。その目標と連動して、定期購読による自立的な財政維持ということが、原則とされていた。その志は見事に首尾一貫したものであったが、しかしそれは、定期購読者をたえず確保しつつ増やしてゆかねば雑誌の存続発展が保証されないということであるから、実務を担当したモナットや協力者たちは、たいへんな苦勞をかさねることになったのである。当然ながら購読者数は単純に累積的に増加してくれはしない。定期購読の期間が切れるごとに、購読を続けてもらうための作業が必要だから、それが馬鹿にならない労力を要請した。

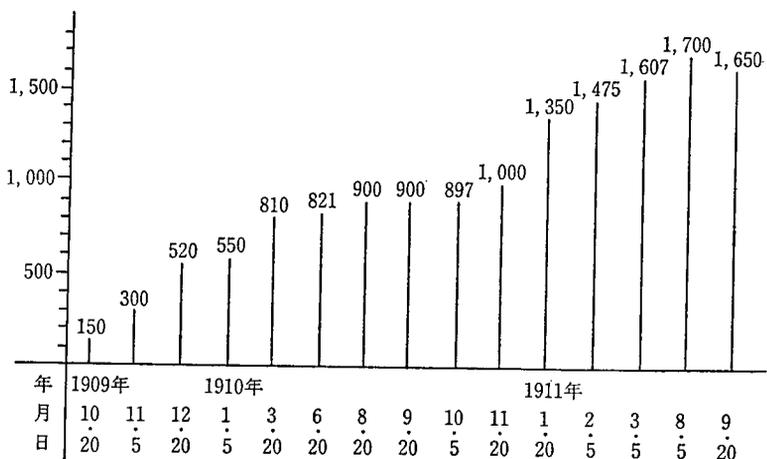
しかし、それが雑誌ほんらいの目標ともかかわった原則である以上、このやり方をまげるわけにはいかない。いきおい、購読者数が減少するようなどときには、グチや怒りもこぼれようというものである。年間10フラン

『労働生活』を読むために (福井)

が高いというけれども、そしてたしかに労働者の家計にとって楽ではないかもしれないけれども、1カ月にすれば1フランにもみたくない購読料ではないか。あの食前酒に金を使うという悪しき習慣を思えば、出せないはずはないではないか、と。ここには、あの第二帝政下の「シュブリーム」⁽⁴⁹⁾に代表されるようなスタイルでの労働運動のリーダーの姿はなく、きわめて真面目で、謹厳実直といってもよいような姿勢がみとめられる。あきらかにミリタンの姿は、19世紀のそれとは変わりつつあった。

購読者数の出入りについて、一例のみあげれば、こんな具合である。第79号(1913年1月5日付)で示されているところでは、1912年12月1日現在の総数が1,755、12月中の新規増加が101、解消が31、差し引き純増70だから、13年1月1日現在での総数は1,825となる。しかし第81号によれば、1月中の新規増加は41で、解消が72、差し引き純減31。したがって1月末では1,794におちこむ。

このような月ごとのジグザグを反復しながら、それでも購読者数は、1



年目に 800、2年目に 1,200 という当初の目標をこえるペースで、2年目まではすすんだのである。そのおおまかな推移は、図表のごとくであった。

誌上に定期的に数値が発表されたわけではなかったが、この時点まではかなり頻繁に公表されていて、数の伸びは劇的ではないにしても順調だったといえるであろう。このあと数値の公表はしばらく途絶える。それは、すでにのべたような 1911 年春すぎから 1912 年夏にかけての、雑誌運営上の危機的な時期と対応している。じっさい、そのような危機的状況は第 69 号（1912 年 8 月 5 日付）で告白されていた。ただそのさいにも、雑誌の刊行が遅れはしても中断しなかったことを考えれば、購読者数のはなはだしく減少し続けた状態は、想定しづらい。1912 年末の第 77 号によると、同年 5 月はじめには、一時 1,290 までおちたとのべられてはいるが、全体としては停滞状況を打破できなかったということだったと思われる。過去の刊行各年の 1 月 1 日現在での購読者数の推移を图示した第 115 号（1914 年 7 月 5 日付）によれば、1912 年 1 月 1 日の数値は 1,816 となっており、むしろ他の年よりも多い。ところが、1 年にわたる公表中断ののちにまた数値が公表された第 72 号（1912 年 9 月 20 日付）では、過去の最高時には 1,750 あったとでてくるから、第 115 号の数値とは整合しない。どちらが正しいかを判定する資料は手元にはないが、誌上には繰り返し 1,750 あるいは 1,755 がこの時点の数値としてでてくるから、おそらくこちらの数値のほうが正しい可能性が高く、少なくとも当事者たちはそれによって停滞状況を意識していたのであった。

第 72 号で公表された現在数は、1,500 であった。このあと、また不定期ながら、いくつかの刊号に数値が公表されているが、1912 年 12 月に 1,755 にもどったのち、ピークを 1913 年 1 月、3 月の 1,825 として、ほぼ 1,750 から 1,800 のあいだを上下している。ほんとうの末期に、いまい

『労働生活』を読むために（福井）

ちど活動態勢が立てなおされはじめて、第114号（1914年6月20日付）では1,900をこえたことが報告されているが、それがこの雑誌にとって文字どおり最後のきらめきになったのである。

購読者の地理的分布については、第17号（1910年6月5日付）、第35号（1911年3月5日付）、第77号（1912年12月5日付）、第95号（1913年9月5日付）、第103号（1914年1月5日付）に、それぞれ各時点での県別、外国別の数値が公表されていて、増加した県、減少した県などについて、編集部なりの簡単な動向分析が加えられている。ここで各県別のリストをまとめなおして再録する必要はないであろうから、趨勢のみを整理しておく、ほぼつぎのごとくなる。

パリ、セーヌ県、セーヌ＝エ＝オワーズ県の、当時の首都圏を構成する三地域が、やはり絶対数においてもっとも多いが、多いといっても、三地域あわせて一貫して総数の半分をやや下まわる程度であるから、雑誌の広がりはず想以上に全国的であった。これら三地域あわせた数は、1910年6月で総数807のうち396、約49%。以下同様に1911年2月で1,607のうち713、約44%。1912年12月で1,755のうち783、約45%。1913年8月で1,767のうち773、約44%。1913年12月で1,753のうち808、約46%である。

購読者数ゼロの県は、1910年には12県あったものの、1911年以後はそれぞれ4、2、4、4である。山間部や農村部が弱かったことは、雑誌の性格上、当然予想されるとおりであった。上記のパリと2県をのぞいて購読者数が多かった県を、上位5県だけあげると、下記の図のような推移であった。

これも当然ながら、産業のさかんな県、あるいはそのような都市をかかえた県が、全体として優勢であったが、しかし数の増加は、それぞれの地

1910年6月	ノール(22)	ローヌ(17)	ロワール, エロー(16)		オード(13)
1911年2月	ローヌ(60)	ノール(47)	ロワール, セーヌ・アンフェリウール(38)		エロー(29)
1912年12月	ローヌ(63)	ノール(43)	ジロンド(37)	ロワール(32)	セーヌ・ アンフェリウール(31)
1913年8月	ローヌ(85)	ジロンド(41)	ノール, ロワール(40)		セーヌ・ アンフェリウール(31)
1913年12月	ローヌ(93)	ジロンド(41)	ノール, ロワール(35)		パ・ド・カレ(25)

に熱心な宣伝をしてくれる有能な地域的ミリタンがいるかないかにかかっており、ローヌ県の場合のミリオン、ジロンド県の場合のデュメルクなどといったミリタンは、その典型的事例であった。

外国では、フランス語圏をもつ隣接国が優勢だったのは自然で、1910年6月に13だったベルギーは、その後1912年に38になり、1913年8月、12月には39、36となる。スイスは1910年6月には18で最多であったが、その後は28、20、20、16と、上昇後に下降している。他はすべてひとけたであったが、なかではアメリカ合衆国が1912年12月に16と、唯一例外として目をひくが、1913年には9におちた。植民地であったアルジェリアは15からはじまり、最多で29、ほぼ20代の前半であった。

購読者の職業別分布についても、モナットたちは分析しようとはしたのだが、データ不足だったのか時間不足だったのか、果たすことができなかった。刊行前には、教師とか医師、弁護士、ジャーナリストなど、組合運動に関心をもつ知識人が買うだけではあるまいか、という危惧の念もあったようだが、第2号では、はじめの150名中にそのような階層の人たちは1割もいないことが記されている。

ただ第103号は、個人購読であるか団体購入であるかの分類は発表しており、それによれば、総数1,753のうち、個別組合による購入は266、組

『労働生活』を読むために（福井）

合連組織による購入は101, 協同組合が20, その他の集団が41, 残りが個人で1,325あり, その総数にしめる比率は75%をこえていた。モナットたちにしてみれば, なぜ組合組織がもっと買ってこないのだ, といういらだたしい思いがつきまどっていたことはたしかである。

6. 雑誌の基本性格

本稿では, 内容の読みに入る前提として『労働生活』の形式的側面を検討してきたのであるが, 最後に, 雑誌の基本性格にふれておわりとしたい。

すでにみたように, この雑誌は労働大衆へのプロパガンダを目的とするのではなく, ミリタン自身の思索を深め, 行動の理論的基盤を形成することをめざしていた。これまでのプロパガンダは, プロパガンダの主体であるミリタンの位置については不問に付し, いわば自明の優位においてしまっていたが, それでは将来の社会のにない手たちを形成することはできない。いまやミリタン自身の質の向上が求められている。その質とは, 目的へむかう情熱と, 観察にもとづく的確な現状認識の獲得能力との, 双方を前提にする。そのうち, 情熱というのは各人が内にもつものであって, 雑誌が伝えるべきものではない。この雑誌の目的は, 冷静な観察調査, 認識, 経験に基礎づけられた現状にかんする批判的思索なのだ, というのである。こうした点は, 誌上において繰り返し強調されたのであった。

もっと理論そのものについての記事がほしい, という声にたいして「中核」グループは, むしろ現状にかんするデータ資料そのものをはっきり自分たちで構築し, 提示する, そうした documentationこそが行動の第一の前提であり, かつそのことのなかにこそ行動の指針が示されるはずだ, という観点をゆずらなかつた。彼らが自分たちの雑誌の現況について, 統

計データを整理し、購読者にすべて提示しようとし続けたことは、こうした彼らなりの資料についての考え方に根ざしていたのである。

そして何より、現在の経済の仕組みについてよりよく知ること。労働者階層じたいが生産をになうことができ、自主管理型の社会を準備できるためには、経済のメカニズムについて熟知する必要がある。ゼネストとか社会革命といった合言葉は、情熱を喚起するにはふさわしいが、しかし経済についての備え *une préparation économique* なしには、労働者階層として将来社会のになう手にはなりえない。彼らはこう考えたのであった。来たるべき革命は経済的なものとなるであろう。さもなくば、革命は結局おこらないであろう。こう考える彼らは、変革を推進するには労働大衆をプロパガンダで動員すればすむほどなまやさしくはない、ということを鋭く自覚した集団であった。

経済の仕組みを分析するにも、また外国の運動状況を的確につかんで井の中の蛙におちいらないようにするためにも、かつまた自分たちの位置が歴史的な運動展開の継承のうえにあることを納得するためにも、彼らは自分たちの手で資料づくりをして、みずから学ぶことをみずからに課したのであった。歴史についての彼らのアプローチは、きわめて学問的であるといつてよい⁽²⁰⁾。そこにはたしかに、19世紀末葉からはっきりしてくる科学主義、実証主義のにおいが、生真面目な零屈気のなかになだよってくる。けれども、同時代の経済学や社会学がまだまだ不十分にしかなしえなかった現状分析へ、サンディカリズムの運動のなかから着手してゆこうとした彼らの営みは、決してドンキホーテ的といつてすますことはできない質をおびたものとなるだろう。たとえばこの雑誌には、テーラー主義の導入について明確に分析的に、学問的に、はじめて労働者の側から対応しようとした記事が、メライムの手によって連載されることになる。また、モナット、

『労働生活』を読むために（福井）

メラム、ロスメルらの「中核」グループのリーダーたちは、第一次大戦勃発後にはほとんどすべての社会主義者やサンディカリストが「ユニオン・サクレ」になだれこんでいったなかで、あくまで冷静に事態を見すえつつ反戦の意志をつらぬく道を模索した少数グループを、形成することになるだろう。ジュリアールがいうように⁽²¹⁾、たしかにこの雑誌はミリタンたちの社会的結合の場をつくらんとするものにちがいはなかったが、同時にその結合の質、あるいは場の質を、彼らがどのようにつくろうとしたのかを、その主張内容に立ち入って考えることが、つぎの課題となるのである。

注

- (1) ジャン・ブーヴィエ『フランス帝国主義研究』（権上・中原訳、御茶の水書房、1974年刊）、第6章「労働運動と経済変動」、とくに200、201、204ページ参照。また、革命的サンディカリズムとゼネスト論については、なにより喜安朗『革命的サンディカリズム——パリ・コミューン以後の行動的少数派』（河出書房新社、昭和47年刊）を参照。
- (2) Michelle PERROT, *Les classes populaires urbaines*, p. 532, in *Histoire économique et sociale de la France*, tome IV, vol. 1, 1979.
- (3) この点については Michelle PERROT et Annie KRIEGL, *Le socialisme français et le pouvoir*, 1966 のペロー論文参照。
- (4) Victor ROUDINE, *Pourquoi la vie est chère*, in *La Vie Ouvrière*, n° 61, 5 avril 1912, p. 3.
- (5) Colette CHAMBELLAND, *La vie ouvrière (1909-1914)*, in *Cahiers Georges Sorel*, 5, 1987, pp. 89-93.
- (6) 後述するように『労働生活』誌は、運営の実情を購読者に明示することを方針としたので、毎号ではないが、多くの号にそうした面での情報が掲載された。それらの実情報告や読者への呼びかけなどは、初期のころには表紙裏や裏表紙に印刷されていたが、第19号から「われらの内にて *Entre nous*」という通信欄として内容に組みこまれた。「読者の便りから *Parmi nos let-*

- tres」という欄とならんで、これらは内部状況を知る重要な手がかりとなる。
- (7) これらの人物については Jean MAITRON (éd.), *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français*, troisième partie: 1871—1914, tomes 12—15 の各項目を参照。
 - (8) Cf. *La Vie Ouvrière*, n° 21, 5 août 1910.
 - (9) 相良匡俊「フランス左翼出版物の系譜——1880—1930年」『月刊エディター・本と批評』第75号（1981年1月号, 日本エディタースクール出版部）を参照。
 - (10) Fernand et Maurice PELLOUTIER, *La vie ouvrière en France*, 1900.
 - (11) Colette CHAMBELLAND, *op. cit.*, p. 92.
 - (12) *Ibid.*, p. 92.
 - (13) Victor MÉRIC, Merrheim, in *Les Hommes du Jour*, n° 297, 27 septembre 1913.
 - (14) Colette CHAMBELLAND, *op. cit.*, p. 93.
 - (15) Cf. *La Vie Ouvrière*, n° 31, 5 janvier 1911.
 - (16) Cf. *La Vie Ouvrière*, n° 27, 5 novembre 1910, n° 32, 20 janvier 1911.
 - (17) ロスマルについてはつぎを参照。 *Dictionnaire, op. cit.*, t. 15; Christian GRAS, *Alfred Rosmer et le mouvement révolutionnaire international*, 1971.
 - (18) デュボワについては *Dictionnaire, op. cit.*, t. 12.
 - (19) Denis POULOT, *Le Sublime*, 1872, および木下賢一「第二帝制下におけるパリの労働者階級について」『社会運動史』5, 1975 参照。
 - (20) Cf. *La Vie Ouvrière*, n° 35, 5 mars 1911.
 - (21) Jacques JULLIARD, *Le monde des revues au début du siècle*, in *Cahiers Georges Sorel*, 5, 1987, p. 7.

(史学科 助教授)